

水平線

目次

I 虹の立ちたい前

予感	14
匂い	19
水	22
波 I	25
なめくじ	28
透明 I	31
虹の立ちたい前	33
虹 I	37
虹 II	40
螢 螢	42
虹の戻ってくるまでを	45

II 永遠までの半分のところ

曙の白い長距離列車	50
媒体	53
滝	56
水平線	58
運動	61
透明放射球光体	67
点 として 線	70
波 II	73
構造 体	74
場所	76
水平線 水平線	80
二律相同	84
永遠までの半分のところ	90

Ⅲ

瞳 瞳 瞳

運 命 96

瞳 99

瞳と瞳たち 103

透 明 Ⅱ 106

この宇宙でない宇宙の螢 109

美しいです 112

宇 宙 117

宇宙から 119

波 Ⅲ 123

波 Ⅳ 127

未 来 130

覚 書 132
初出一覧 134

装画 新井 深

I
虹の立ちたい前

予感

有るからには 有りはしないのです

雲が それを知っています

したがって

無いからには 有らねばならないのです

虹が それを心得ています

有るのと無いのと 同時です

有るないと無いと 同所です

ですから

雲と虹 溶けあつて

消えます

雲は虹に 虹は雲に

なるために

キラリと光りあいます

生れ出る存在に

予感など ありはしないのです

お互いがお互いに入れかわる

同感があるだけです

ええ 雲は雲の幻となって

ええ 虹は虹の幻となって

予感

匂いの風のなかから

ありはしない明日が振りかえります

立ち昇ってくる

見えはしない

闇の曙にくるまれて

ほら
雲と虹

そこに届くことのありえない

予感のなかで 濡れあっています

白い幻 そして 紅い幻

雲の虹 そして 虹の雲

ほら ほらっ

匂
い

匂い 曙の飛沫しづみです
生れる前の光です

匂い 自分を抱くほんやりです
自分に抱かれるほんのりです

匂い 羞かしさから生れる羞かしさです
裸です 裸よりも裸です

匂い 膨らみます だから明るみます

明るみます よって膨らみます

匂い 生れたばかりなのに恋しています
ええ恋の親ではなくて恋の子です

恋 向うむきの匂い それが慕わしさ
恋 こちらむきの匂い それが羞かしさ

喜びの匂い 丸い唇をあけています
悲しみの匂い 丸い唇を結んでいます

匂いのない匂い 白い雲しか流れぬ白い空
匂いのある匂い 青い雲しか流れぬ青い空

ああ 幸福しあわせの匂い ええ 花の匂いです

はい 宇宙の匂い そう夢の匂いです

匂い 息をつめてこちらへ降りてきます
匂い 息を吐いてあちらへ浮きあがります

匂い

愛です

水

おのれがおのれに見つめられた果てに
溶けるよりほかなくなってしまった光

それが 水

おのれがおのれに映っていることが
透き通るということです

水

おのれがおのれに映っている

白い闇です

おのれに乗って浮かぶことがあります

はい 雲です

おのれを哀しみと知らない哀しみは

軽いのです

空 故郷です

抱きあげてあげます

波 I

波

水ではない水 光です
肯定です 否定です
上昇する 落下です
落下する 上昇です
前進する 後退です
後退する 前進です

晝 波

物質である非物質です

非物質である物質です
見える音
觸れる匂い

夜
波

夢のなかに入ります
深海魚から見つめられます
深空鳥から見つめられます
夢を洗うのです

朝
波

夢のそとに出ます
深海魚から見送られます
深空鳥から見送られます
そとの夢に入ります

波 水ではないのです 光ですとも
波 明日ですとも 今日のままの

波 波 波
波

波

なめくじ

蛞蝓なめくじ

這うことしかない光の軟体です

蛞蝓

解とけ出る夢の芯しんなのです

蛞蝓

空の奥ふるさとが故郷 溶けてからの星です

純粹

期待を抜き去られた希望 蛞蝓

蛞蝓

水平に雨の降る地平線を歩きます

蛞蝓

まだ喘いでいる夢の肉なのです

蛞蝓

肉を溶かせば夢のこちらに出られるのですか

外そとを見ない目 おのれの夢のほかを信じない明るさ

蛞蝓

這う流れ星です もう一つの深海魚です

蛞蝓

耳を立てて星の深空鳥と交信します

夢の芯

どんなに溶けても 芯の夢

無目的

だから どこまでも歩きやめない

蛞蝓

消え去るとは故郷に帰ること

蛞蝓 希望も絶望も信じない無望です

蛞蝓 悲しみの原体そのもの 原体の悲しみそのもの

溶けるまで歩き続ける星 神さまからだけ愛されている

透明 I

祈りとは

蛞蝓かたつむりの殻からを溶かして蛞蝓なめくじにするまでの

お天気雨

わたしを透き通らせて

あなたを透き通ること

祈りとは

お天気雨があがつて虹になるまでの

水平線

この世を透き通って

あの世を透き通らせること

ああ 地球の白い朝を 宇宙の

青い昼につなぐ

水平線

虹の立ちたい前

橋

氷っているのです

だから 揺れている

揺れている

よって 氷っているのです

川

揺れているのです

よって 氷っている

氷っている

だから 揺れているのです

波立つものが 波立っている

波立たないものが 波立たないでいる

おのれの前に おのれがあつて
きみの後^{うしろ}に きみがあつて

空

広がっている 流れている

流れている 広がっている

つまり 写るものが写っている

橋 揺れて ほのかに

川 揺れて くっきり

ほら

宇宙を浮き沈みさせている

もう一つの宇宙

虹

立たねばならないのです

虹
I

花の夢のなかを 夢の魚が泳いでいるのです

夢の花のなかを 魚の夢が泳いでいるのです

虹

虹の涙は 涙の虹です

涙の虹は 虹の涙です

ええ ええ もう同じなのですから

空にあがってしまえば 花の夢は 夢の花

涙の虹は 虹の涙

紫 藍^{あい} 青 緑 黄 橙^{だいだい} 赤

七色は 一列

空にならんでしまえば 夢の花は 花の夢

虹の涙は 涙の虹

赤 橙 黄 緑 青 藍 紫

一列は 七色

虹

虹 II

内側から外側への 丸い色の輪の瞳です

紫 目を覚さまそうとしている星の瞬またたき

藍 夜明けの空の高さ

青 昇りやまぬ瀧壺の飛沫しぶき

緑 夜の夢を焚たいている朝の光

黄 ゆらめいている昼の夢の陽炎かげろう

橙 すべての思い出の内側の灯りあか

赤 悲しみを炎もして愛の焰に変える花篝はなかがり

前の世のちから後の世へ流れる巨おおきな愛の

そうですとも 虹

透明になる直前の七つの色の 楽器

はい 弾はかれないからこそその 楽器

螢 螢 螢

螢 灯^{とも}ります 消えます 消えます 灯^{とも}ります

灯りつばなしにならない 消えつばなしにならない 螢 螢

螢 光を吐き光を吸い 螢 闇を吸い闇を吐き

螢 あの時へゆき 螢 この世に戻り

光よりも強い光をつくる螢 闇よりも濃い闇を招く螢

光で闇を黒くする螢 闇で光を明るくする螢

螢 闇を扶^{えぐ}る光 螢 光を扶^{えぐ}る闇

螢 光の筈となる 螢 闇の筈となる

螢 沈黙の筈となる 螢 筈の沈黙となる

螢 光の魂 螢 魂の光 おお

螢 灯らねば前生 灯れば来生 ^{またた}瞬けば現生

じつに輪廻^{りんねてんせい}転生の灯りの点滅者 つまり天使

螢 灯^{とも}す 瞬間の闇のなかの青空を その風を

闇空の宙の螢の飛ぶ湖の青 宙の闇空の螢の泳ぐ青の湖

螢 螢 螢

夢の星月夜

星月夜の夢

ああ

螢 螢 螢

魂 魂 魂

虹の戻ってくるまでを

蛞蝓^{なめくじ} 見上げ続けています

次第次第に空が高くなるのです

虹 透明です 色を消しています

羞かしくてしかたないのです 自分を

無い愛の思い出の花でしかない

思っているのではないでしょうか

白い雲 近寄ってきます

ふいに茜色に染まります

透明な虹 向うむきになります

どうしたのでしょうか 七色

泌^{にじ}み出てきたではありませんか ああ

ふいに何百年かが経^たったのです

でも まだ 蛞^{なめくじ}蝓 見上げ続けています

みなさん 虹の戻ってくるまでを

恋人たちは永遠と呼んでいるのですね

Ⅱ 永遠までの半分のところ

曙の白い長距離列車

一行句ヲ集メテ早春ノ句イヲ編ミタイノデス

鐘の瞳^めを撫でていたら 花鳴った

膨ランデイル蕾ハ鐘ノ代リニ鳴ルノデスネ

桜咲く 雲咲く 人咲く 眞昼咲く

桜ガ咲クトモウ 桜ダケヲ咲カセテオケナイノデス

桜散る 雲散る 人散る 眞昼散る

眞昼トハ桜ソノモノノコトダッタノデスネエ

菜種梅雨 姉 妹の日記見て

菜種ノ花ト妹ノ花トヲ長雨ガ咲カスノデシタ

雨粒 目をつむっている 生れたあとだから

マダドキドキシテイル雨粒 可愛イイデスネ

雨粒 目をあけている 死んだあとだから

スグ崩レルノデスネ 可哀イソウニ

曙の白い長距離列車 水平線

水平線ト平行ナ列車ニノッテ早春 走ッテ行キマス

媒体

深海魚 これがいるからには
深空鳥 あれがいなくてはならない

その媒体が 虹

鳥が鳴くからには
魚も鳴いて

いのち
生命の息を

虹は呑み

深海虹 これがいるからには
深空魚 あれがいなくてはならなくて

その媒体が 月

魚が鳴くからには
波も鳴いて

生命の灯りを
螢は吐き

深海螢 あれがいるからには
深空鳥 これがいなくてはならなくて

その媒体が 星

ああ 宇宙

死んで生きている神こそ
光る媒体

滝

滝 垂直でしかありえない白い虹です

滝 自己処刑です しかも自己肯定です

滝 断罪です ええ 救済なのです

滝 否定です だから 肯定ですとも

滝 希望の死体ではない 絶望の生体です

滝 愛の糾弾です そして糾弾の愛です

滝 昇ることが落ちることである祈り

滝 噴出する壮絶な笑いですとも

お判りですね 瀧に打たれなければならないのです

あなたの魂が天に昇ってゆくためには

神さまに撃たれなければならないのです

水平線

水平線 必然です

空と海を仕切る 直線の緊張

無ければ 空と海 一滴の涙になります

水平線 謎です

必ず見えます きつと在るのです

それなのに 誰も到着しないのです

水平線 矛盾です

光っていない光の筋です

くつきりしている闇の糸です

水平線 理念です

みんなが見つめます 合体したがります

だから 近寄られれば遠のいてゆきます

水平線 初等幾何学です

太陽の光の垂線と

水平に交差している星たちの夢の一行

水平線 高等物理学です

水平線の手前にきた存在たち驚きます

背後を見れば水平線そこにあるではありませんか

水平線 痛い幻です

でもその向うからしか明日は上らないのです
たとえ明^{あさ}後^ご日^{にち}のない明日であるにしろ

ああ いま 一つふうわりと白い夢の雲

沖へ出てゆきました なぜですか それを
一筋の水平線 縦になって追ってゆくのです ほうら

運動

水平線 水平線

じつは そんなものありはしない

近寄ってみれば 何の線もない

だから 乗り越えることではしない

空と海とを切断などしていない

奇怪ですか 水平線 水平線

白い幻の一直線だけは知っているのです

この宇宙はあの宇宙かもしれないことを

おのれの一直線はおのれでないものの一直線かもしれないことを

おお 運動だって 停止だから

停止だって 運動です

ほら 雲

停止しながら 運動する

運動しながら 停止する

でも なぜなのか

きっと

この宇宙とは あの宇宙なのだから

あの宇宙とは この宇宙なのだから

そうですとも

この地球のなかで

水平線だけは 知っている

この宇宙は この宇宙でないことを

どの宇宙も どの宇宙でないことを

したがって

じつに 眞実を尊重する水平線

その眞実通りを生きている

運動しながら 停止している

停止しながら 運動している

この宇宙は あの宇宙なのだから

あの宇宙が この宇宙なのだから

その無くて 有る距離を

その有って 無い距離を

信仰深く 生きている

生きて 信仰を深めている

ああ 雲を見つめて 生きている

雲から見つめられて 生きている

水平線 水平線 水平線

透明放射球光体

水平線

ただ一点を通っての

四方八方への

縦横のあらゆる点への

限りのない 数のない

全方位放射する水平線のその

水平線のすべてのすべての群れの集まりの

ああ

その 中心の一点の

炎える白い光の一点の

おお

実在する無の

虚在する実の

とお そこを中心として無限回転する

宇宙

透明放射球光体

光体放射球透明

とおお はあっ

点　そして　線

直線　曲線　垂線

平行線　迷走線　懸垂線

空と海を分割し整合し変転させる

欲情の光の群れの運動の重複

波　波　波

この宇宙とあの宇宙を往来する

観念の自己凝視と他己凝視の合一と交換

飛沫^{しづき}　飛沫　飛沫

ああ　懸垂線　迷走線　平行線

垂線　曲線　直線

あらゆる運動は整合されねばならぬ

その白い血の運動こそ停止

その青い虹の停止こそ運動

おお 無数の一本の

水平線

水平線

水平線

波 Ⅱ

暗黒の時間の天空に吸いあげられていった

あの垂直線の青さ

きみへの愛慾の断たれた永遠 それが

水平線に齒咬みさせている白さの無限

構造体

宇宙海 そこにある 垂直線

そこにある 水平線

地球海 そこにない 垂直線

そこにある 水平線

夢中海 そこにある 垂直線

そこにある 水平線

ああ それらのどれが

いま 飛ぼうとしているのか

朝焼けの遙けさに

場所^{ところ}

必ず宙に浮くことしかない存在^{もの} あります

きつと往^ゆかねばならない場所^{ところ} あります

いいえ 死のほかに

はい 目を閉じて

ええ 夢のなか

そう ありはしない光のなか

ああ

神さまの空と人の海の

その合わさる水平線の

その果てでしょうか

さあ きつと 宇宙の裏ではないでしょうか

そちらに向った青い波は

死を見ている夢でしょうか

はい 宙に浮くことしかない存在^{もの} あるのです

ええ 往かねばならぬところ あるのですから

そうですとも 宇宙に底のないからには

白い雲となつてしか帰つてこないのですから

でも 向うが昏^くれると こちら必ず煌^{きこめ}きます

ええ 星月夜 ですとも

あれ 夢を見ている死でしょうか

ええ 何処にも地面のないからには

ああ 水平線の果て

きつと宇宙の裏へ

行くのですとも

この宇宙

水平線 水平線

はじめてのはじめてのときの 水平線

さよならのさよならのときの 水平線

むこうからしか来ないものが むこうへ戻る

こちらからしかゆかないものが こちらに帰る

こちらへこさせないもの

むこうへ戻らせないもの

水平線 水平線

宇宙は

縦の海を

横の海で

支えている

その遐^{とほ}い おのれの白さ

その白い おのれの遐さ

絶望の希望よ

希望の絶望よ

ゆれないものはゆれなければならないのに

ゆれるものはゆれてはならないのだから

水平線

水平線

二律相同

わたしはわたしであつてわたし以外のものではない

これは理性によつて証明される必要のない眞実

ほとんどの人が直ちに首肯うなずくところの公理

自同律 と呼ばれる

わたしはわたしでなくてわたし以外のものである

これは直観によつてだけ証明される眞実

数少ない人だけが直ちに首肯うなずくところの公理

他同律 と呼ばれる

ああ 水平線

あれはあれでしかないのですか

自同律に服従しているのですか

それとも

おお 水平線

あれはあれではないのですか

他同律に服従しているのですか

それとも

こちらから見える白くて黒い一直線

空と海を横に截^たちきる黒くて白い一直線

そこにゆけばありはしない光の非現実

そこにいつでもありはしない光の遺跡

水平線 水平線

自同律と他同律を超えているのですか

そしてすべての公理を否定する無なのですか

それとも宇宙によって構成された夢の横糸なのですか

ああ わたし見つめます 見つめるとは

なぜか 見つめられることとなります

水平線 しだいに垂直線になってゆきます

ゆっくり この宇宙そのものでない

もう一つの宇宙から吊りあげられていく

光の縦糸^{たていと}となつてゆくではありませんか

いまにして わたしは信じます

自同律だつて 他同律です

他同律だつて 自同律です

二つの公理に何の違いもありはしない

信じましょう 信じるのをやめましょう

眞実こそ 幻

幻こそ 眞実

存在しないから 水平線 存在するのです

存在するから 水平線 存在しないのです

おお おお 宇宙 大宇宙

永遠までの半分のところ

水平線

希望でしょうか

近づけば遠ざかります

でも 飛び越されても身をすくめるだけ

闇がくれば消えます

けれど そこにいるのです

光がくれば現れます

でも 近寄れば遠ざかるのです

秘めやかにしづしづと

遠ざかって もっと遠ざかります

はい 何万本かの絶望の縦系の織る一本の希望の横系

はい 何万本かの希望の横系の織る一本の絶望の縦系

そうです 前の世と後の世の光の国境です

そうです 夢の表と裏を縫いあわせる白い血の糸です

ええ 何万本もの線のつくる一本の線

ええ 何万本かの線に分割される一本の線

当然 くっきり 希望ですとも

はっきり あつて ないもの

きっと なくて あるもの

そうです 永遠までの半分のところにある仕切りです

でも あと半分を足しても永遠に届きません

はい 左と右にだけ伸びる 水平線

もし これが 白い希望でないのなら

海は決して波打たないのです

ああ 水平線

水平線

Ⅲ
障
障
障

運命

大空に湧き出る光は 必ず星になります
星になった光は きつと地球に届きます

大地に煌^{きらめ}き出る水は きつと川になります
川になった水は 必ず海に入ります

でも川が流れこまなくても海あるでしょう
けれど海がなくても川流れてゆくでしょう

入道雲 引つ張つてゆきます しかし何を

夕焼け 呼び寄せます そして何処^{どこ}へ

鳥たち知っています でも風の歌を歌いません
魚たち知っています でも水の歌を歌いません

川は曲がるだけです 引返えせんから
海は待っているだけです 遠ざかれせんから

でも 星になった光は川のなかの水なのです
だから海 夜にならなくても星空になるのです

魚たちそれに見とれています 黙ったまま
鳥たちそれに見とれています 瞼を閉じたまま

入道雲 引つ張りあっています 何かと

夕焼け 呼びあっています 何かと

ああ 宇宙を超える宇宙はないのですから
そして 宇宙を超えない宇宙はないのですから

ええ 水平線を超える水平線はないのです
そして 水平線を超えない水平線はないのです

瞳

光の当る底がなければ鏡になりません

でも その底のない鏡があるのです 空です

下からその向うが見えますか いいえ

けれど 向うの向うから 向うが見ているのです

光の当る底がなければ鏡になりません

だから その底のある鏡があるのです 海です

下から その向うの向うが見えますか いいえ

けれど 向うの向うから 向うが見ているのです

でも やがて夜の闇がゆっくり浸みいつてきます

すると 底のない鏡 底のある鏡 同じ一つの鏡になります

空と海 溶けあいます 光 水に 水 光に なります

ああ 地球の瞳のなか 宇宙眠るのです

ぐっすり たっぷり 溶けるのです

向うの向うという黒い青空を抱き入れて

そして その 昼と夜と夢を

必ず見つめ続けているために

いつも いつまでも 青い

小さな瞳たちの 長くてどこまでもの 一列

青い水平線

おお

瞳と瞳たち

朝

水平線の上に大きな青い

瞳

それがこちらを見つめている

昼

それがむこうを見つめている

夜

それが眞上を見つめている

夢

そして その朝と昼と夜と夢を

必ず見つめ続けているために青い

小さな腫たちの一列の痛み

水平線

おお

透明 II

白魚^{しらうお}です 魚^{さかな}の祈り 祈りの魚

透明 光の涼しさ 涼しさの光

透明 光の芯です 芯の光です

波うつ光 光うつ波 透明

透明 ここにあるむこう むこうにあるここ

光の風です 風の光です 透明

透明 北氷洋の氷のなかの南氷洋の月

南氷洋の月のなかの北氷洋の氷 透明

透明 深海魚の眼のなかに流れついた星

透明 深空鳥の眼のなかを通りぬける星

透明 熱帯魚の点^{とも}す夢の灯^ひ 夢の灯の点す熱帯魚

透明 永遠を瞬間に稀釈することのできる力

でも 退^{はる}けさよりも遠い退けさ 透明

透明 それがあるからこそ魂になれる喜び

透明 それがあるからこそ神さまを信じることのできる喜び

到達のむこうへの到達 透明 ああ

あつてはならないものです あつてないはずのものです

透明 神さまの内容そのもの よって祈りそのもの

おお 透明のそとに噴き出していつてこそその透明 祈り

だから 透明 白魚にならないのです はい

この宇宙でない宇宙の螢

草の露に大空浮かんでいます

この露の一粒 宇宙ですか

窓ガラスに夕焼け映っています

このガラスの一枚 宇宙ですか

川の波に入道雲宿っています

この波の一個 宇宙ですか

それぞれ 宇宙のなかの宇宙です

でも どちらが向うですか

草の露 窓ガラス 川の波
どうも近すぎます

だから 早々^{はやばや}と日が落ちて
昏^{くら}くなってゆく 草の露 窓ガラス 川の波

そこに ああ 螢たち やつてきます
三匹 七匹 十匹 十五匹 ほらほらほら

灯^{とも}ります 息をします 瞬^{またた}きます

川の波 窓ガラス 草の露

踊ります 飛びます 狂います

螢 螢 螢 螢 螢

あつ あれ 魂ですね じつに青い
この宇宙でない宇宙の螢

草の露の奥 窓ガラスの向う 川の波の底
この宇宙でない宇宙の呼吸する光

宇宙のなかの宇宙でない宇宙
宇宙のそとの宇宙である宇宙

ああ ああ ああ

螢 螢 螢 螢 螢

美しいです

水平線

あります

ありません

よって 何ものも

超えることができません

水平線

そこまです

そこからです

つまり 何ものも そこで

終ることができません

水平線

到着点です

始発点です

したがって完全体です

自由自立体です

水平線

祈りの終りです

祈りの始まりです

だからこそ そのまま

神さまのお住居すまいです

水平線

この世のものでありません

あの世のものでありません

この世あつてのあの世のものです

あの世あつてのこの世のものです

水平線

この世のものであの世のものです

あの世のものでこの世のものです

生れる前の地球の齒並みです

消え去る後の地球の齒跡です

つまり 水平線

美しく

美しく

美しいです

宇宙

たった一個の波が波打たない限り

海の全体は決して波打たない

たった一匹の蟋蟀こおろぎが鳴かない限り

野原の全体はどうしても鳴り出さない

こここの一人が幸福にならない限り

いつになってもみんなは幸福になりえない

祈ります 神さま この一人が祈らない限り

ほかの一人は永久に祈りはしないのです

ああ 宇宙

この波の一個が波打たない限り

あの蟋蟀の一匹が鳴かない限り

宇宙から

水平線まで

海の上にあるのは 波です

水平線から

海の上にあるのは 空です

水平線まで

波の上にあるのは 希望です

水平線から

波の上にあるのは 祈りです

大空まで

雲のこちらにあるのは 風です

大空から

雲のむこうにあるのは 宇宙です

宇宙まで

宇宙のなかにあるのは 宇宙です

宇宙から

宇宙のむこうにあるのは

さあ 宇宙のむこうにあるのは

ええ きつと もう一本の

白い白い水平線ですとも

波 Ⅲ

波 押します 押されます おのれが おのれに

波 おのれは水です おのれは光です だから水は光 光は水

波 透明が内実なかみです 透明が外実そとみです よって内実は外実 外実は内実

波 進みます 波 退さがります 波 住すったり来たりします

波 この波はあの波です でも あの波はこの波ではない

岸の波は水平線の波ではない 水平線の波は岸の波ではない

波 この波はあの波ではない 波 昨日の波は明日の波ではない

でも 波 あの波はこの波です 波 明日の波は昨日の波です

波 波 波 波 時間をもちません 空間をもちません

それなのに 波 波の時間と波の空間によってしかできあがっていません

波 時間で空間です 時間の空間 空間の時間 なので

波 時間と空間が一つになって押しあうから進むのです

波 時間と空間が背きあうから碎けて撥けるのです

けれど 波 決して死にません 進むだけです 退るだけです

波 波 波 碎けるだけ 飛沫になるだけ 空にあがるだけ

そうです 虹 あれが波の生きながらの死体 死にながらの生体です

しかも 波 波 波 夜になれば壮麗な祭礼をおこなうのです

波 波 波 黒い遙かな空を抱きよせて水の星月夜とするのです

波に星 星に波 波に月 月に波 波に闇 闇に波 彼方に波 波に彼方

揺れます 星と月と闇と彼方 飛沫しあう 彼方と闇と月と星

ああ 波 波 波 宇宙を映す夢そのものの

おお 波 波 波 夢そのものを映す宇宙の

どこまでもいつまでも伸び縮みする

しなやかに愛される瞳たちなのです 波 波 波 波 波

波 Ⅳ

スイスイズズン ズイグルウン
ルルイルルウン ルイルルオオ

波 波 泳ぐ鳥 鳥泳ぐ

エエイ エエイ エエ

波 波 飛ぶ魚さかな 魚飛ぶ

ヨヨイ ヨヨイ ヨオ

どこからもいつからも瞳をあげて

呼びかけてくる遠くの眼まなこの遠く

水平線のむこうの未来線のむこう
未来線のむこうの希望線のむこう

波はゆく どこまでも地球の白い海を泳ぐ鳥
夢はゆく いつまでも宇宙の青い空を飛ぶ魚さかな

ああ 永遠を創きざめてゆくための瞬間 波
瞬間を煌きらめかせてゆくための永遠 夢

おお 無限を創きざめてゆくための瞬間 夢
瞬間を運んでゆくための無限 波

波はゆく どこまでも地球の白い海を超え

夢はゆく いつまでも宇宙の青い空を超え

ああ 波の夢
おお 夢の波

スイスイズズウン ズイグルウン
ルルルイルルウン ルイルルオオ

未
来

横倒しされた永遠 水平線

A

花の幻があれば、幻の花があります。海の宇宙があれば、宇宙の海があります。その宇宙海の創造へと踏み出してゆきたい第一歩が、本書『水平線』です。

これは、一昨年来の『宙宇』、『透明光体』に続いての、始原へのわたしの讃歌です。その讃歌を綴ることによって、わたし自身の救済です。

B

地球の水は、地球のむこうにある星たちももってきたもの、といわれています。もしも、そうであるのなら、水のなかにはその星たちの目の瞳がひそんでいるはずで。そうだとすれば、数限りないその瞳たちが一本になった行列が、水平線なのではないでしょうか。線です。けれど、もつと遠くに退がって見れば、丸い弧です。飛行機でゆけば、その向うへ飛べます。でも、その時、その下に水平線はないのです。

これは、しかし、宇宙の形成をおこなった大きな存在の意思と配慮の結果です。けれど、何を目的としての、何を祈つての、その作業であつたのか。

昭和七年七月の二十日頃、宮崎県の青島の対岸折生^{おりふぎこ}迫村の漁師のかたの家に泊り続けて海のなかで揺れてばかりいたわたしは、ふっと、そう思つたのでした。以来、その数限りない瞳の水平線に取り憑かれて大きくなりました。

水平線は、じつに不思議です。こちらから見れば、あります。でも、そこへゆけば、ないのです。それをめぐつての、いくぶん本体論的な稚い夢想が本書です。

若い少年への挽歌です。

C

芸林書房の林親儀さんの御厚意によって、本書は上梓されます。また、音楽家三善晃さん、海産物商古屋善興さん、いまは在天の画家小野忠弘さん、このお三人から励ましをいただけてきました。このかたがた、および初出の場を提供して下さった諸誌の編集のかたがたに、強くお礼を申しあげます。

二〇〇三年一月三十日

宗 左近